

自由南アフリカの声

Voice of Free South Africa

2014年2月

No. 63

～1冊の本が人生を変える～

発行 / アジア・アフリカと共に歩む会

Together with Africa and Asia Association (TAAA)



2014年2月の報告

- 2013年8月～2月 南アにて図書・学校菜園・サッカー支援活動など。
各地で図書研修会、移動図書館巡回、有機農業研修会実施
国内にて、英語の本などを収集、分類・再梱包作業
- 8月 南ア活動現地訪問
- 9月 TAAA 南ア代表一時帰国 報告会
- 9月 408箱（英語の本11949冊、算数セット、サッカーボール）を南アに発送
- 9月 東京 JICAにて TAAA 活動報告会
- 2014年1月 さいたま市にて TAAA 活動報告会

目次

- ・南アフリカからのたより（平林薫） 2
- ・ネルソン・マンデラさんへの感謝をこめて（津山直子） 6
- ・TAAA 活動報告会レポート（鯨井幸一） 8
- ・国内の活動（野田千香子） 10
- ・主な活動 11
- ・寄付を下された方々 12



こじんまりしたハイマン小学校を訪れた移動図書館車。中央はTAAA代表 久我祐子
(ハイマン小学校の詳細はP7に掲載)

南アフリカからのたより

TAAA 南ア事務所代表

平林 薫

マンデラ逝去

南アフリカは、昨年12月に“ネルソン・マンデラ”という偉大な存在を失った。訃報から国葬までの10日間、改めてまわりの人たちとマンデラの歩んだ道について語り合い、私たちはこれからどのように生きて行くべきか、を真剣に考える時間となった。ズマ大統領が“マディバ（マンデラ）に会ったことがある人もない人も、一人一人が何らかのマディバ・モーメントをもっているだろう”と話していた。

ハウトンの自宅前やマンデラ像があるサントンの広場、各都市のメモリアル・プレイスに弔問に集まる人たちにテレビがインタビューしていたが、こんなにもたくさんの人たちが“マディバ・モーメント”を持っているのかということに驚かされた。米国の南ア大使館に勤務する白人女性は、ケープタウンでマディバに会って話を聞いたというが、“彼から本当に多くのことを学びました。彼に会って私は変わったのです。マディバに会わなければ今の私はありません”と、まるで肉親を失ったかのように涙を浮かべながら話していた。

大統領時代の一日に密着したドキュメンタリーでは、プレトリアからケープタウンに日帰りする様子が映し出されていた。早朝から大臣とのミーティングや白人経済界の人たちとの会合での演説、官邸に戻ると夜11時を過ぎるというハードスケジュール。官邸には秘書やドライバー、シェフなど多くのスタッフがいるが、みんなに笑顔で挨拶をし、相手を気遣ったり、ジョークを飛ばしたりと温かい人柄がしのばれた。偉ぶらず、誰に対しても平等に接し、常に他人を思いやる姿に、彼は私たちに人間のあり方を教えてくれたのだと感じた。

マディバは、“和解”をもって新しい国作りに臨んだが、何より同じ国内に住んでいながら、お互いのことを全く知らなかった人々の中の“理解”を深める役割を果たしたと思う。南アの白人たちのマディバへの尊敬と信頼は、彼が、ほんの少し前まで“敵”であった人々を憎しみではなく、同じ人間という立場で敬意を持って接したことから生まれたものだろう。

南アは今年、民主化20周年を迎える。改めて、マディバや多くの闘士たちが、自由を勝ち取るために命をかけて闘ってくれたことに感謝し、彼らの存在をいつも心に刻んでおきたい。そして、彼らが築いてくれたこの民主的な社会を次の世代に確実につなげていくことが私たちの責任である。南アの社会では、人々がよく“先祖が見ている”ということ言う。“先祖”となったマディバに敬意を表するのであれば、私たち一人一人はもちろん、政府関係者もマディバが悲しむようなことは決してしてはならない。

南アの現状と人々の生活

南ア社会はインドやブラジルに並び経済格差がとても大きい。先進国並みの豊かな暮らしをする人々がいる半面、途上国の最も厳しい環境と同様に、今日を生きるのが精一杯の人々もいる。そのような人々にとって社会保障は命をつなぐための大切なシステムである。ただ、社会保障の受給者数や金額が年々上がってきているため政府の負担が大きく、人々の社会保障への依存は、仕事への意欲を失わせるものにもなりかねない。高齢者に支給される年金は、本来、長い間差別と抑圧の中で苦勞してきたお年寄りが余生を楽しむために使うべきものであるが、現状では子供や孫、ひ孫の生活費になってしまっている。

南アは失業率が大変高い。全国平均値は24.7%と4人に1人が失業している状況だが、遠隔地では就職先に限界があり、率はもっと高くなる。特に若者の失業は深刻な問題である。マディバの訃報にショックを受けていた12月6日の夕方、ハロー、ハローと呼ぶ声が聞こえて外に出ると、若い男性2人が“何か仕事はないか”と尋ねてきた。“すでにスタッフがいるので今は特にない”と答えると、“今日一日仕事を探しまわっていてお腹がペコペコ”だという。金曜日の午後ということでもうにも何もなくて、ポテトチップ一袋を渡すと大喜びだった。どこに住んでいるのか尋ねると、まさに私たちが活動している地域のムタルメだという。彼らのような若者がこの地域だけでもどれほどいることだろうか。子供の人口が大きい南アでは、今後ますます深刻な問題となっていくことが懸念される。



写真：左と中央はシボンギンfund高。

右はワイルダー小。小学校でも高校でも男子生徒が畑仕事にいそしんでいます。

家事・育児・畑仕事は女性の仕事

地域では伝統的に男性の役割、女性の役割が決まっており、勇敢な戦士であるズールー男性は“戦い”が一番重要な仕事であり、家庭内のことは一切女性の仕事であった。時代が変わり、ライフスタイルも変わってきたが、今でもこのような意識が強く残っている。かつてイギリス人が入植し、サトウキビのプランテーションを始めたころ、地域のズールー人たちは“男が畑で下働きなどできるか”と突っぱねたため、インドからの労働力に頼らざるを得なかった。今、そのインド系住民の子孫は成功して裕福になっている。ズールー民族の誇りは理解できるが、社会の変化に対応する柔軟性も必要であろう。

支援活動の中でジェンダーを考えると、通常、女性に機会を与える目的を持った場合が多いが、地域での活動の中で見えてきたのは、女性の方が厳しい環境の中でも前向きにがんばっていることだ。もちろん、女性の雇用機会は少ないが、白人家庭でお手伝いや手仕事の内職などで家族を養っているケースが多い。地域内に残る男性たちは主に放牧に従事しており、若い男性が働く場所は多くないため、グループでぶらぶらしている姿を見かける。

学校で生徒を見ていると、全体的に男子はシャイで女子の方が活発だ。特に高校生くらいになると、男子は恰好をつけたり、無気力に見えたりする。がむしゃらに何かをするのは格好悪い、と考えるようなところもあり、あきらめも早いようだ。ピアプレッシャーもあり、いいことも悪いことも友達の影響という場合が多い。教師はよく“男子はレイジー”というけれど、怠けているのではなく、現在の厳しい生活環境の中で、夢や希望が見いだせないということも考えられる。

今、社会の変化に伴って、男女共に意識を変えていく必要があると思う。お母さん方の中には家事は女性の仕事と頑なに考え、男の子には家事を全くさせない人もいる。ただ、もう“そんなこと言っていられない”状況なのだ。重労働である水汲みはかつて女性の仕事だったが、手押し車に水タンクを載せて運ぶ男性の姿や、川で洗濯をする若い男性の姿も見られるようになった。また、中には料理や裁縫が好きで上手な男子もいる。今、この地域に必要なことは、物事を決めつけず、人々がそれぞれの能力を発揮できるような機会を作ることなのだ。

私たちは活動を通して、地域の人々、特に若い男性が、ぜいたくはできなくとも地域内で生活していけるような環境作りを応援したいと考えている。彼らが様々なことにトライし学べる機会と、希望を持って活動できるよう、モチベーションを維持できるプログラム作りも重要である。地域の人々が大切にしてきた“リスペクト”を失わず、伝統を守りながらも新しい社会に対応し、バランスの取れた地域作りをするためには、何としても“ズールー男子に頑張ってもらわなくっちゃ！”ならないのである。

写真：右 シベクルワンドレ小 インゲン豆の収穫





左 ムタルメグループの畑 州農業省担当者が視察



右 クワバガ高 牛糞を使って液肥を作る

JICA 草の根技術協力事業

“学校を拠点とした有機農業のモデル地域作り”が昨年8月より開始となった。先行事業では、クワズルーナター州ウグ郡の離れた3地域の学校を拠点として地域への有機農業促進を行ったが、今回は、その一地域であるヒバディーンを少し拡大し、ムタルメ・トゥートン・ウムズンベ学区の沿岸部から山間部まで4つのクラスターに分け、40校と活動を行っている。ヒバディーングループとして先行事業に参加した14校は継続して菜園活動を行い、各クラスターのリーダー的役割を果たしている。事業では、対象地域が有機農業のモデル地域となり、学校を拠点とした活動の方法を他地域でも取り入れることで、郡内に有機農業が定着、発展することを目標としている。

リソースの乏しい遠隔地域における有機農業の有効性としては、できるだけ地域内で入手できるものを用いて畑作りをすることでコストが抑えられること、農薬や化学肥料を使用しないため安全で栄養価が高い作物がとれることなどがある。もちろん、有機農業は大量生産が難しく、販売時にも生産の時間と労力を考慮すると価格が上がってしまうなどの難しい点もあるが、失業率が高く、社会保障に頼って生きる遠隔地域の人々がある程度食糧を自給できるようになれば、生活コストが抑えられるだろう。前述の通り、地域では若者の失業率の高さが大きな問題となっているが、彼らが地域内で生活していられるよう、農業が一つの職業の選択肢になれば、と考えている。

今回の事業では対象校40校中14校がセカンダリースクール（中高校）で、生徒たちの将来に向けて技術指導の一つとして菜園活動を行っている。高校では資金やリソース不足から、なかなか技術を教える機会がないのが現状である。高校を卒業した若者たちは、経済的に少し余裕があれば大学や専門学校に行くが、多くは就職先を探す。しかし十分な学力や技術を持っていない場合が多いため、結局おばあさんの年金に頼って生活するか、ピースジョブ（日雇いや契約の仕事）が見つければラッキーという現実である。

対象地域は気候や土地など畑作りのポテンシャルを持つ。しかし、長い間社会的にも経済的にも抑圧されてきた人々にとって、農業といえば白人経営の大農場であり、自分たちの手で何かを始めるなどとても無理、とあきらめている。また、先述のように“畑仕事は女性のもの”という意識も強く残っている中、菜園活動を継続していくことで、小学校で技術教育として畑作りに携わっている生徒たちが大人になるころには、かなり意識の変化があるのではないかと期待している。

では、すでに大人になっている地域の人たち、特に男性が農業をポジティブに捉え、従事するためにはどうした

写真:右 TAAA 事務所へ日本から本が到着



らよいか。今回の事業では、対象校 4 校の敷地を拠点として、卒業生および地域の若者がグループを作って有機農業を学び、実践するプログラムを取り入れた。

活動を開始して半年の現時点では、やはり全体的にメンバーは女性の方が多い。そのような中、ムタルメ小学校をベースとして活動しているグループはメンバー全員が男性。学校はコミュニティーの中心地にあるため、彼らの畑は地域住民の注目を集めている。ただ、最初のミーティングには、畑作りをすることで賃金がもらえると思い参加してきた男性もいた。収穫を家庭で利用できることは利点ではあるが、確かに誰もが生活のための現金収入が必要である。今、グループメンバーと事業のカウンターパートである現地 NGO の URDO メンバー、農業指導員など関係者間で収穫の販売先や方法について協議しており、できるだけ早く収入につなげられるよう努力している。



エシバニニ小 本棚と本の寄贈。図書室が充実していく。

学校図書活動支援プロジェクト

国際ボランティア貯金の事業として、7-9月の第3学期と10-12月の第4学期に対象校32校の図書活動への支援を継続して行った。主な活動内容は、各校の状況に合わせて必要な本棚や備品、及び本の購入と配布、日本から届いた英語の本の寄贈、移動図書館車での巡回訪問指導と本の貸出し、研修会の開催等。司書教師を対象とした研修会は9月4日と5日、10月22日に開催し、図書室の管理運営、図書委員会メンバーの役割や活動内容について指導した。移動図書館車の巡回は対象校の教師及び生徒たちに喜ばれているが、貸出しできる生徒数や巡回回数に限界があるため、特に第4学期は学校図書室整備への支援に力を入れた。各校の司書教師や図書委員会メンバーの生徒と共に蔵書の整理・分類を行い、指導員が図書室の管理運営について具体的にアドバイスをした。図書室の開設式を行った学校もあった。

また、埼玉国際協力基金より図書室のスペースのない高校2校へコンテナ図書室の寄贈を行った。学校にとって図書室を持つことが全く初めての経験であることから、一校では本棚にぎっしりと教科書を並べてしまったが、指導員のアドバイスで図書室用蔵書の整理と分類を行った。1月の新年度から正式に図書室が開設となり、利用され始めている。このように、各校で図書室の設備が整ってきているが、図書室としての機能を十分に果たせるまでには、まだまだ蔵書やアドバイスを必要としている。

日本から届く英語の本は質が高く、すぐに利用できるものばかりと学校から大好評。これからも TAAA は遠隔地の学校の図書環境を把握しながら、それぞれのレベルやニーズに合った本の寄贈とアドバイスを継続して行っていきますので、今後とも様々な形でのご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。



写真：バンギピーゾ小 本の整理を手伝う生徒

ネルソン・マンデラさんへの 感謝をこめて



写真：マンデラさんと筆者

レイト（祝福）しよう」と言ったのもそんな称賛の表れであると思う。

そして、亡くなって2ヶ月が過ぎた今、「さあ自分を追悼し、称賛することはもう十分だから、私も精一杯の力を尽くした平和、正義、平等が世界で実現するために、一人ひとりが行動してほしい」とお墓の中でつぶやいているように感じる。一人ひとりが行動し、共に築こうという「マサカネ」(building together)という言葉は、マディバがもっとも大事にした言葉のひとつである。

TAAA は、その活動に関わる人々がそれぞれの個性や能力を大事にして、「マサカネ」を実践していると思う。そして TAAA の歴史を紐解くと、マディバとのつながりが見えてくる。マディバが初来日した 1990 年に、報道番組でのインタビューや歓迎集会を通してその声を聴き、主張や人間性に共感した人々の行動が TAAA の設立へとつながっていったのだ。初来日の滞在期間は、1990 年 10 月 27 日～11 月 1 日で、同年 2 月に 27 年ぶりに監獄から釈放されたマディバは、活動禁止を解かれた ANC の再構築、白人政権との対話の準備、国際的な支援の獲得などで大変タイトなスケジュールをこなしていた。その中で 5 泊 6 日にわたり日本に滞在したというのは、かなり長い日程だったといえる。

市民社会が協力して「ネルソン・マンデラ歓迎実行委員会」を作り、東京、大阪で歓迎集会・コンサートを行い、のべ 35000 人が参加した。それ以外にも、テレビの報道番組でのインタビュー、国会演説の中継などを通して、日本中の人々がマディバの民主化実現への思いと支援を求める声を聴いた。

私は、当時 ANC 東京事務所に勤務し、マディバの訪日を準備し、同行する役割を担う一人であった。日程調整も大変だったが、一番気をつけたのが、「体調を崩すことなく、無事日本での滞在を終えること」であり、同時に「体調を崩さず、予定の日程を終えること」であった。その時すでに 72 歳で、日本到着前にマレーシアやオーストラリアを訪問していたので、疲れもでていた。マディバと 10 人ぐらいの同行者の代表団だったが、その中に当時の主治医のランデラ医師もいた。「ドクターストップがかかったら、スケジュールをキャンセルする」というのが、ANC 代表団側からの要請だった。マディバは長い獄中生活と年令のせい、朝は早起きで調子もよかった。でも、分刻みの日程をこなしていくうちに疲れがでて、夕方には疲労をにじませていた。毎日無事日程が終わるようにと祈るような気持ちでいたが、一番大事な日程のひとつであった日本反アパルトヘイト委員会の皆さんとの会合が、ドクターストップのためにキャンセルとなった。1960 年代から始まった日本での反アパルトヘイト運動に力を尽くしてきた人々である。ドクターストップに対して為す術がなく、そのキャンセルがマディバ滞りに関わる仕事で一番つらかったことであった。

津山 直子

2013 年 12 月 5 日、ネルソン・マンデラさんが 95 年の生涯を閉じ、世界中が悲しみに包まれた。95 歳という年齢とその人生で成し遂げたことを考えると、まさに「大往生」と言えるであろう。今は故郷であり一番愛した土地、東ケープ州クヌに祖先とともに眠る。南アの人々が尊敬を込めて呼ぶ氏族名の「マディバ」とここでは呼びたい。

一人ひとりの人生がかけがえのないものであるが、どれほど他者のために生き、多くの人に影響を与え、心に生き続けるかで人生を測るとすると、マディバの人生は他に類をみないほど称賛に値するものであったことは間違いない。南アの人々が、「悲しむのではなく、セレブ

テレビの報道番組では、23時からと遅い時間から始まる「NEWS23」は、筑紫哲也さんによるインタビューを事前に収録しておくことになった。「ニュースステーション（現在の報道ステーション）」はぜひ生出演でということ話が進められた。22時からの番組なので、ふつうは絶対スケジュールを入れない時間帯であるが、20%近い視聴率を取っていた番組に生出演することは、日本人々に直接伝える機会としてたいへん重要だということで、番組中の久米宏さんによるインタビューが実現した。テレビ局の隣のホテルで出演まで休養できるようにした。報道番組を見た方たちからも大きな反響があり、民主化を支援する基金の口座も番組中でアナウンスしてくれたので、多くの寄付が寄せられた。TAAAの創立メンバーである野田千香子さんは、ニュースステーションのインタビューを見たことが、ANC東京事務所でのボランティアや本を通じた教育支援に関わるスタートとなったそうだ。私自身も、「新しい国づくりのためには人づくりが大切だ」というマディバの言葉に背中を押されて、その後南アに住み、現地での活動にかかわることになった。

長くなってしまったが、思い起こすと23年前のことが、マディバスマイルと呼ばれるあの笑顔とともに昨日のこのように思い出される。

マディバの健康で、私が貢献したというか、きっかけを作れたことがひとつある。長年の投獄生活のために万全といえない体調を少しでも改善できればと、日本滞在中に友人で鍼灸師の植田智加子さんに指圧をお願いしたのだ。私自身も時々治療してもらっていて、植田さんのやさしさが伝わってくるような指圧は心地よく、マディバも絶対気に入ってくれるだろうと思った。私の提案はいくつかのハードルを越えて実現できた。そして、滞在中の治療だけでなく、植田さんはその後南アに住み、99年頃まで鍼灸治療を続けることになる。二人は強い信頼で結ばれ、マディバにとって体だけでなく心も癒される時間だったと思う。95歳まで長生きできたことに植田さんの治療も貢献したことは間違いない。

最後に、今の日本社会にもマディバの人生から学ぶべきこと多くあると思うので、少し触れたい。そのひとつが、「排除しない社会」ということだ。マディバは、強者ではなく弱者、少数者に目を向け、一人ひとりを大切にし、排除しない社会を作ろうと尽力した。政治家としても一人の人間としても、それを貫き通した。また、相手をリスペクトし、理解しようと努力し、対話しようとする姿勢についても挙げられる。それは外交政策における、真の「積極的平和主義」といえるだろう。

そして、私たち一人ひとりが、マディバの精神や行動を自分なりに受け継いでいき、地域社会や国際社会での小さな変革（チェンジ）を積み重ねていくことが、何よりの追悼になるのだと思う。

【津山直子】1988年～1992年南アANC東京事務所勤務。1992年～日本国際ボランティアセンター（JVC）勤務。94年～JVC南ア事務所代表として南アに15年滞在し、支援活動に従事。帰国後、GCAP JAPAN代表。関西大学客員教授。TAAA会員。



2013年9月、TAAA報告会の際に「世界の貧困をなくそう！」という願いを込めてSTAND UPを行なった。右端が筆者：津山直子

表紙の説明： 丘の上にあるハイマン小学校は、水道も電気もない困窮した学校ですが、校長をはじめ先生たちがとても教育熱心で生徒思いです。図書担当の先生は、移動図書館から生徒たちが借りる本をチェックして、レベルに見合わない本をかりていると「他の本をかりなさい」とかり直させていました。菜園プロジェクトの対象校でもあり、水は近くの川から汲んできます。校長先生は「菜園でとれる野菜を使って給食をよくしたい」と抱負を語っていました。（久我祐子）

TAAA 活動報告会レポート

鯨井 幸一

TAAA は年に 2 回程度、支援者の皆さまに活動実績を報告する会を催していますが、1 月 11 日（土）午後 2 時より、さいたま市内与野本町コミュニティセンターに於いて、2014 年最初の報告会を実施しました。

報告に先立ち、講師の TAAA 南アフリカ事務所代表の平林薫さんから、昨年（2013 年）12 月 5 日に逝去された、反アパルトヘイト運動の指導者で元大統領ネルソン・マンデラ氏について、言及しました。氏の死去後、年齢や人種を問わず



報告をする平林薫 TAAA 南ア代表

大変多くの国民が、哀悼の意を表し、改めて氏の偉大さを実感したと述べました。

平林さんがとても印象に残ったこととして、Madiba moment（Madiba はマンデラ氏の愛称）を挙げました。マンデラ氏に会った人や、遠くから見かけただけでも感じる、“とても偉大な人に逢って幸せだな”“身内でもないのにととても親しみを感じる”といった感情を指す表現だそうです。マンデラ氏の追悼式が行われた FNB スタジアムで、オバマ米大統領とラウル・カストロ キューバ国家評議会議長が握手を交わしたシーンは、政治観の違いを超え、自由と民主主義のために生涯を捧げたマンデラ氏を追悼しようとして、世界が一つになった Madiba moment を象徴する最も印象的な出来事だった、と述べました。

TAAA の報告会では毎回テーマを決めて、平林さんに講演してもらおうのですが、今回は『南アフリカへの教育・農業・スポーツ支援～目指せ、ズールー人“男子力 UP”～』と言うタイトルで、ズールー人にフォーカスした講演となりました。

Zulu とは“天”という意味があり、ズールー人は“天国の人々”という意味です。

ズールー人は、今から 2,000 年ほど前、東アフリカから南下してきたそうで、19 世紀初頭、シャカ王がズールーを統一し、強大な王国を作り上げました。ズールー人は、装飾品としてビーズを重宝し、儀式の時などは、ビーズをふんだんに使った綺麗な衣装をまとったそうです。現在、TAAA の支援地域である、クワズールー・ナタール州ではシャンベ教会という新興宗教が勢力を拡大しているとのこと。

ズールー人男性の特徴として、マイペースな性格を挙げられ、ズールー社会は男性優位である、と述べました。また、がむしゃらに何かをするのは格好悪いとされ、彼らが最も大切にしていることは、年長者や先祖に対するリスペクトの精神である、と指摘しました。

次に、南アフリカの現状について報告がありました。

非常に大きな経済的格差、高い失業率、社会保障への依存が大きい、などの点を指摘し、これらの要因が、厳しい生活への不満や将来への不安へととなり、犯罪の増加など社会の不安定化へと繋がるとしました。

クワズールー・ナタール州に住むズールー人の 7 歳から 17 歳の 23.9%が両親と同居していない、23.9%は親と同居していない、多くの場合、おばあさんと同居です。つまりおばあさんの年金に頼っているということになり、親は出稼ぎで生活費を入れる場合もあるけれど、そのまま町で自分たちの暮らしをしてしまう人たちも多く、遠隔地のおばあさんに預けられた子供たちの環境が厳しくなっています。

学校でもこのような子供たちが多くなっていることが問題となっています。

しかし、ズールー人の慣習として、家事・育児・畑仕事は女性の仕事、という考え方が根強く、もっと、ズールー人男性にも発奮してもらいたいという、平林さんの思いから、副題に、【目指せ、ズールー人“男子力UP”】と付けたのでした。

続いて、TAAAの具体的な活動報告に入りました。

初めに、JICA 草の根技術協力事業『学校を拠点とした有機農業のモデル地域作り』についての報告がありました。

現在、対象地域を4つのグループに分け、40校を支援しています。

小学生の活動では、畑仕事をしたことのない児童が殆どなので、菜園に慣れさせることを目標に支援を行っています。高校生は、農業を将来の就労先にしてもらいたいという願いも込め対象校を増やしました。また、生徒のモチベーションを高めるため、TAAAの農業支援ファシリテーターでもあり、自然農業専門家のリチャード・ヘイグ氏の農場“エナレニ”にも訪問し、直接指導も仰ぎました。

また、この事業では、対象小学校4校をベースに卒業生グループも作り支援を行っています。卒業生グループは男性中心の“ムタルメグループ”と女性が中心の“トゥルベケグループ”に分けられます。

ムタルメグループのメンバーには、畑仕事は女性の仕事という意識を変えてもらうため参加してもらっています。トゥルベケグループは、畑仕事に慣れている、女性がメンバーの多数を占めているため、実績もムタルメをリードしており、収穫も多いとのことでした。

次に、国際ボランティア貯金の助成による『基礎教育支援のための学校図書室の配備と巡回指導』事業について報告がありました。この事業の目的は、“本へのアクセスを容易にする”“本を通し、基礎学力・読解力を向上する”ことの二つです。

図書委員会を設立し、生徒自ら図書の管理や貸し出しを行ったり、教師を対象にした研修会も開催しているなど、寄贈された本の、有効活用が着実に行われている旨報告がありました。本以外にも、本棚などの図書室用備品の寄贈も行われたとのことでした。

また、彩の国国際交流基金からの助成で、図書室用コンテナ二つの寄贈も行われました。

昨年コンテナを寄贈した、ルトゥーリ高校が“図書プロジェクト”のリーダー的存在であり、目覚ましい活躍を見せているとのことでした。

最後は、サッカー交流について、報告がありました。

南アフリカは、サッカー人気がとても高いですが、ボールを含めサッカーで使う道具が満足に揃っていません。THAN 球プロジェクトとの共同プロジェクト『バファナ・バニャニャ』プロジェクトを通じ、サッカーボールを多数寄贈しましたが、ボールを手にとった時の子供たちは、目をキラキラ輝かせるそうです。

また、女子のサッカートーナメントが企画されるほど、女子のレベルが高いと、報告がありました。

最後に、平林さんから、菜園プロジェクトにしてもサッカー交流にしても、とても女子が頑張っているので、「頑張れ、ズールー男子」とエールを送り、報告会は終了しました。



～国内の活動～

野田 千香子

★毎月1回、本その他の梱包作業

毎月一回、日曜日に南与野の作業場に会員の有志が集まって、本の分類や梱包作業をします。浦和学院高校の生徒さんやネットで知った初めてのかたが参加することもあります。総勢平均5～10人。その日によって違います。9月に年一回の(株)商船三井の援助による本などの一括輸送の寸前には、作業場のスペースはほとんど無くなりました。406箱の段ボールが積み上げられました。重さにして6トン半です。これらの本は無事に南アの平林南ア代表のいるTAAA事務所に届きました(P3の写真参照)。



本を幼小中高レベル別にする



輸送用ラベルを貼って積み上げる



右はレベル分け主任の大友さん

★サッカーのマニュアル作成

TAAAはTHANK球プロジェクトその他のかたの協力により、これまでに1259個のサッカーボールを南アに送りました。2013年8月20日には多摩大学の体育館でTHANK球プロジェクトが南アフリカの生徒たちのために、サッカーの指導マニュアルのDVDを作成しました。THANK球プロジェクトは多摩大学の卒業生や現役のフットサル部員の皆さんからなるボランティア団体です。

2012年、THAN球プロジェクトの森直之さんと堀田浩平さんも南アのTAAAの活動地域の学校を訪問し、子どもたちの動きを見ていて、サッカーの技術を教えてあげられたら、ぐんと力が伸びるだろうと思ったそうです。帰国後、サッカーの技術マニュアルの冊子とDVDを作成することを始めました。この日には、森さん、堀田さん、そして多摩大1年生のフットサル部員の大戸さんと渡邊さんが大学の体育館に集まりました。サッカー未経験の野田は、見学がてら助手として参加しました。マニュアルはこの3月に南アを訪問する際、持参して先生と生徒に手渡します。

★Roll Over Dribble★

- Use the front part of the foot to touch the ball.
- Put your foot down as soon as it touches the ball. Switch the planted foot, then immediately touch the ball. This gives rhythm to your...

これはマニュアルの一部です。(翻訳は上林潤子さん)



◆ 主な活動 (2013年7月1日～2014年1月15日)

下線は南アにおける活動

7/4 ダーバンへ学校寄贈用本の引き取り 平林薫
 7/5・8 本の仕分けと学校巡回訪問準備 平林
 7/4 JICA 横浜アフリカ展示ブース設置 久我祐子
 7/8 (株)近鉄とミーティング 久我
 7/9 学校菜園事業準備ミーティング 平林
 7/11 州教育省にてミーティング(JICA プロジェクト)
 7/14 梱包作業と総会 丸岡晶 浅見克則 西村裕子
 鯨井幸一 野田千香子 森直之 門馬秀子 高野千恵美
 土屋潤 久我祐子 茂住衛 浦和学院高校より 八谷優史
 長谷川直也 森山涼平
 7/15 クリスチャンアカデミーより本引取り 浅見
 7/16～19 本の仕分けと学校巡回準備・訪問 平林
 7/20～7/30 会報 62 号編集他 野田
 7/20～7/30 会報 62 号校正他 西村
 7/22 移動図書館車学校巡回訪問 平林
 7/23 図書車ライセンス更新と寄贈用本棚の引き取り
 7/24～26・29 移動図書館車学校巡回訪問 平林
 7/24 サッカープロジェクト会議 森 久我
 7/26 本の分類 大友深雪 久我 土屋 野田
 7/30 州教育省にてミーティング(JICA プロジェクト)
 7/31～8/1 図書車巡回訪問・卒業生グループ会議
 8/1 JICA 事業契約成立
 8/2 ダーバンへ学校寄贈用本引き取りと農具の購入
 8/2～4 会報封入 高野
 8/5～6 学校巡回訪問指導(図書および農業) 平林
 8/6 マンデラ財団懇談 久我
 8/7 JICA スタッフ会議と卒業生グループ研修 平林
 8/9 TAAA オフィスにて本の仕分け(中地明子さん他)
 8/11 梱包作業 鯨井 北爪健一 野田 津山ネオ 西村
 高野 森 今井七海
 8/12 学校巡回訪問指導(図書および農業) 平林
 8/13 農具の購入と卒業生グループミーティング
 8/14 福島へ送る画材セット梱包 高野
 8/14～16 学校巡回訪問指導(図書および農業)
 8/20 サッカーマニュアル作成 森 堀田涼平 渡邊 大戸
 8/19～24 TAAA 久我代表現地視察訪問 平林
 8/26・27 卒業生グループミーティング 平林
 8/28・30 教師対象農業研修会 平林
 8/29 学校巡回訪問指導(図書および農業) 平林
 9/2・6 学校巡回訪問指導(図書および農業)・卒業生
グループミーティング 平林
 9/3 学校巡回訪問指導(図書および農業) 平林
 9/4・5 教師対象図書研修会 平林
 9/8 作業 大友 森 鯨井 野田 西村 伊藤健一 久我
 9/9 卒業生グループミーティング 平林
 9/13 南アへ本を出荷 408箱 浅見 久我 野田
 9/10・13・16 学校巡回訪問指導(図書および農業)
 9/17 州教育省地域担当マネージャーとミーティング
 9/19 HP 管理作成会議 関根彰博 久我

9/18・19 学校巡回訪問指導(図書および農業)
 9/20～10/9 日本へ一時帰国 平林
 9/23～9/27 報告会用資料作成 鯨井
 9/24 ミーティング 久我 平林
 9/29 TAAA 報告会 JICA ひろば 講師:津山直子 平林
 10/1～3 石巻へ文具送付準備 高野
 10/6 作業と会議 平林 久我 鯨井 野田 西村 大友 浅見
 佐藤詩織 伊藤健一 森 丸岡
 10/7 JICA キックオフオープニング会議 平林 久我 野田
 10/19 宇都宮にてフットサルイベント 森直之
 10月 数日、報告会準備 丸岡晶
 10/14～18 学校巡回訪問指導(図書および農業)・卒業生グ
ループミーティング 平林
 10/21 学校巡回訪問指導(図書および農業) 平林
 10/22 教師対象図書研修会 平林
 10/23 ひろしま祈りの石報告書提出 久我
 10/23～25 学校巡回訪問指導(図書および農業)
 10/28 移動図書館車点検 平林
 10/29 南ア大使館民主化 20 周年イベント出席 久我
 10/29・30 学校巡回訪問指導(図書および農業)
 10/31～11/1 JICA 村上氏現地視察訪問 平林
 11/2 日本から届いた貨物の搬入 平林
 11/4～8 学校巡回訪問指導(図書および農業)・卒業生グ
ループミーティング 平林
 11/10 作業 鯨井 浅見 上林潤子 野田 馬場良 塚原博
 若林育真 久我 高野
 11/11～15 学校巡回訪問指導(図書および農業)
 11/13 サッカー支援(THAN 球)HP 開設 森
 1/17 サッカーマニュアル Vol.2 発表 森
 11/18～20 学校巡回訪問指導(図書および農業)
 11/21 州農業省地域担当者ミーティングに出席
 11/22 卒業生グループミーティング 平林
 11/25～27 学校巡回訪問指導(図書および農業)
 11/28 高校 2 校の菜園委員会メンバーが ENALENI 農場訪問
 11/29 学校巡回訪問指導(図書および農業) 平林
 12月 数日、報告会準備 丸岡
 12/2 州教育省ダイレクターとミーティング 平林
 12/3～5 学校巡回訪問指導(図書および農業)
 12/6・9・10 卒業生グループミーティング 平林
 12/8 住所ラベル更新その他 西村
 12/8 作業 鯨井 大友 丸岡 野田 佐藤詩織
 浦和学院高校より 佐藤未悠 小林美穂
 12/11 卒業生グループメンバーが ENALENI 農場訪問
 12/12・17～19・23 卒業生グループミーティング 平林
 12/16 自宅よりトラックで図書搬入 北爪健一
 12/20 州教育省担当者とのミーティング 平林
 12/27～ 日本へ一時帰国 平林
 1/8 ミーティング 久我 平林
 1/11 TAAA 活動報告会 さいたま市にて 講師:平林